

新聞感想文の部

命をつなく

岡山市・灘崎中2年 三宅 紗世実

誰かの中で生きて
初めて六歳未満で脳死判定された男の子の両親の思いだ。このあと、男の子の臓器は他の「誰か」に移植された。自分の子ども、ましてや幼い子ども体の一部が、全く知らない人の体の一部になるなんて、両親はどんな気持ちなんだろう。私は考えてみた。たぶん、「つらい」の一言だと思う。

でも、両親の心境がつづられた文は、とても冷静で前向きだった。しかし、本当はそんな思いだけではない気がする。「本当にこれでよかったんだろうか。」「あの子は嫌だったんじゃないだろうか。」「これは、私の勝手な想像だ。でも、そんな思いもあっていいと思う。」

だから、「改正移植法の施行により、15歳未満も含めて家族の承諾で脳死での臓器提供が可能となってからおよそ2年」たっても15歳未満での提供は二例だけだと、記事には書いてある。その横には「15歳以上の提供は89例と急増」と並ぶ。確かに、私にとって一番近い所で脳死臓器移植を行っている岡山大学病院でも、移植手術が行われたとよく新聞で目にする。

私は、十五歳未満の脳死での臓器提供が少ないのは、子どもの特性も理由

の一つだと思う。記事にはその特性が、二つ書いてあった。一つは、「脳にダメージを負った場合、幼い子どもは大人に比べ回復力が強い」こと。もう一つは、「言葉の表現力が拙く、生前に臓器提供を拒否していなかったことの確認が難しい」こと。

このように判定が難しい中でも、この男の子の両親は決断した。幼い子どもも脳死臓器提供の一步目をふみ出し

たんだ。何事も一步目が大切だとよく聞く。それに、一步目がないと二歩目からは絶対にならない。この場合、二歩目は同じ人ではなく別の人がふみ出す。次々と歩数が増えていき、海外に渡らなくても国内で移植ができるようになってほしい。

でも、臓器提供をする人の家族の思いを考えると複雑な気持ちになる。だから、移植に匹敵するような治療法が

見つかってほしい。今話題のiPS細胞も、多くの命を救う手段となつてほしい。私は将来、医療に携わる仕事に就きたいと思っているので、強くそう思う。

私が目標の仕事に就ける頃には、どんな新しい治療ができていのだろうか。今より多くの命が救える世界になってほしい。

誰かの中で生きて

6歳未満 初脳死判定

両親重い決断 子どもの終末医療に一石



日本の移植転換期に

2012年6月15日付 山陽新聞

寸評

6歳未満の子どもの脳死判定について、両親の揺れる思いに寄り添いながら、臓器

移植のあり方に思いをはせた。移植医療の現状や課題を分析しながら、命を救う治療の将来に期待を投げかけた。